

## (5) 隅田八幡宮経塚出土の経典をめぐって

吉川 聡（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

### 1. 埋納経の特徴

経典を経塚に埋納する行為・遺物の確実な初見は、藤原道長が長徳4年（998）に書写して寛弘4年（1007）に埋納した金峯山経塚の事例である。当初は末法思想と相まって、弥勒出世の時まで経典を残そうとする意図が強かった。それゆえ当初の埋納経は、伝世経と同様に端正に書写・装幀されている。しかし後には、経典を作法に則って書写・埋納すること自体が作善業であるという性格が強くなる。そのような、作法に則って書写した経典のことを如法経という。そこで中世の埋納経は如法経として、他の経典には見られない特徴を持つこととなった<sup>\*i</sup>。12世紀以降の埋納経の特徴を略述すれば下記のようなだろう。卷子本だが、料紙は打紙していない楮紙で、界線は引かない。軸は無いが、紙や細い竹木を用いた貧弱なものである。表紙・紐は破損して確認不能なことが多いが、確認できる場合、表紙は存在しないことが多く、巻緒は簡略な紙紐を用いている。巻き方は、通常通りに巻末の左奥から右端に向けて巻くものもあるが、逆巻にして、巻首の右端から左奥に巻いてあるものもある。本文を朱書したものも多く、血を混ぜることもあったと考えられている。鎌倉時代以降には、縦法量が15cm程度の小さなものとなる。字体は、12世紀には崩れた字体となる。後にはさらに崩れ、室町時代にはほとんど釈読できない程のものもある。全体的には、粗雑で貧弱な印象を受ける。

### 2. 当該経典の特徴

隅田八幡宮経塚は、特に第2経塚の保存状態が良く、経筒中には妙法蓮華経一部八巻の

卷子本が遺存し、開披することができた。巻第一の奥書から長寛2年（1164）9月の書写であることも判明した。また発掘調査で遺構を検出したため、埋納状況が判明した。全八巻の妙法蓮華経は、全体を三重以上の紙でくるんで、金銅の経筒に納めていた。その経筒は他の埋納品と共に常滑焼の甕に入れて、経塚の石組の中に埋納していた。埋納経が中世的な形に変化していく時期の、書写・埋納の実態を窺う好例である。

当該経典は、料紙の一紙長が長く55cm近くに及ぶ点や、厚さにムラのある料紙の質感などから、院政期のものと見て問題ない。その体裁は、当該時期の埋納経としてふさわしい特徴を備えている。すなわち、打紙しない楮紙で界線も引いていない。装幀も逆巻で、右端の巻首から巻末に向けて巻く形である。軸は直径5mm程度でかなり細く、二つに割っており、料紙を挟む形になっている。表紙は存在せず、巻緒は紙紐が巻第一・第二・第四の三巻に遺存していた。また縦法量は24cm程度で、通常の卷子本の経典に較べてやや小さいくらいなので、あまり小型化はしていない。字体は通常の経典よりは崩れているが、問題なく釈読できる程度である。

当該経典には、巻第一の巻首・文中の余白・巻末に識語・奥書が、また巻第二にも奥書が記されていた。識語の多くを巻第一の余白に書き込むという、他にあまり例を見ない形である。一方で巻第三～巻第八には識語・奥書は確認されていない。このような形にどのような意味があるのかは、今後の課題としておきたい。ともかく、人名には僧嚴俊のほか、紀氏（①・⑥）・藤井氏（②・⑥）・大隅氏（③）が確認できる。彼らは紀氏も含み、この地域の有力者と推測される。その内容が

ら、地域の有力者が檀越となって、自らと父母・子孫・師長ひいては衆生の現世安穩・極楽往生を願って経典を制作したことが判明する。先行研究では中世には地方寺社で如法経書写が行われていることが指摘されており<sup>\*ii</sup>、当該経典もその実例と考えられる。

### 3. 如法経作法書との関係

如法経の制作・埋納については、鎌倉時代以降に執筆された作法書が現存している。それら作法書の内容を、主に嘉禎2年(1236)成立の『如法経現修作法』により、一部は正嘉元年(1257)の『如法经手記』も参照して、関係する点を下記に摘記しておく<sup>\*iii</sup>。

経衆が経典を書写した後に経を巻くが、軸は針の如くに細く削る。堅く巻くのが良い。或る説では経は巻き返さずに逆巻のままにするという説もあるが、筆者はその説は採らず、常に奥より巻く。表紙は三寸ほどの紙を用い、紐は紙を細々と切って飯の糊で付け、外題を書く。一部八巻が整ったら、それらを取り合わせて堅く結び、上から紙で包み、紙紐で十文字に懸けて結んで、そこに経衆が連判を付す。その後は「筒銅」(『如法经手記』では「金銅筒」)または竹筒に経典を奉納し、白布を破ったもので結んで、結び目に結縁衆の封を付ける。

また如法経を埋納する際には、「石壇并穴等」はかねて作っておき、「石壇所」に到ると外護者が「土筒」を穴に入れる。次に水をそそぎ香をまく。次に上人が「御経筒」を「土筒」の中に入れる。次に外護者が「土筒」の蓋で覆う。次に石を穴の口に覆い、「石壇」を築き、その上に「石塔」を安置する。また異説では「土筒」は法勝寺の瓦屋であつらえるともある。

この記述は当該経典にも対応する点が多

い。すなわち当該経典の細い軸・巻緒の紙紐・経典全体をくるんだ包紙・金銅の経筒(「筒銅」)・常滑焼の甕(「土筒」)、また経塚の石組遺構(「石壇」)等である。当該時期に中世作法書の骨子が成立していたことが読み取れる。ただし相違点もある。すなわち当該経典は逆巻で、表紙は無く外題も確認できず、また第2経塚の時期の石塔は存在しない点である。このうち逆巻は作法書にも両説が登場し、作法にもいくつかのバリエーションがあったことが分かる<sup>\*iv</sup>。

### 4. 体裁の意味

埋納経は檀越や僧侶たちが願いを込めて、如法経として「法の如く」制作したものである。それが貧弱な作りに見えるのはなぜだろうか。従来想定されていた理由は、弥勒出世まで残す意図が薄れて供養のために書写するという性格のみが残った結果、見栄えにこだわらなくなったというところである<sup>\*v</sup>。そのような消極的な理由のみなのか。一方で、当該経塚にも鏡などの貴重な遺物が多く埋納してある。ならば別に積極的意図もあったのだろうか。この点は難しいが、作法書と当該経典から少し推測してみたい。

『如法経現修作法』には次のようにある。

先立軸。〈木或ハ竹也〉如針細クケツリテ可用之。如法堅巻也。〈或説云、御経不巻反云云。然而只常自奥巻也。堅ク巻之宜也。〉

軸は細くし、堅く巻くべきだという。細く堅く巻くのは、如法経一般に見られる特徴である<sup>\*vi</sup>。この点、当該経典で軸を割り、料紙を軸で挟み込んでいるのは、料紙と軸を強く固定して力を込めやすくし、堅く巻くことを意図したのではなかろうか。巻第一・巻第八では巻首の文字が裏写りしている。軸の近くは最も堅く巻かれる部分であり、裏写りしやすかったものと思われる。その際、巻第一で

は裏写り文字が鏡文字になっているが、巻首の痕跡を見ると、これは軸を経典の右端に付け、その右端の軸を経典の左側に折り込んだために<sup>\*vii</sup>、巻頭の文字が鏡文字となって写ったものである。他の巻でも同様に、軸を内側に折り返したなどと推測できるものがある（第4章第2節（2）3. 参照）。このように軸をやや内側にずらしているのは、力を込めても軸と料紙が外れにくくするためだったのではなかろうか。当該経典に表紙は無いのに紙紐だけは付けているのも、堅く巻いた経典を固定するために紐は必要なのだろう。このように堅く細くしている理由としては、とりあえずは、経筒に入れやすいという実際的理由が思い浮かぶ。ただし私の以前の論考では、南北朝時代の如法経の紙紐と外題の状態から、そこには封をする意図があり、それは如法経は弥勒出世の時まで披見すべきでないからだと推測した<sup>\*viii</sup>。その観点から見ると、堅く巻くのは開披しにくくする意図や、長く保存されるように強度を上げる意図もあるかもしれない。

逆巻については、『如法経手記』に次のようにある。

其後調軸・表紙也。世人常不卷返之。況比校之儀無之。其意趣者、未終其篇、慈尊下生之時可終其功之意也云々。今謂不爾。願力者無謬。釈尊遺法中、設雖終其功、尊興出時何不遂値遇願乎。可笑々々。

この史料によると、世の人には、如法経は巻き返さず逆巻にして校正もしないのだと言う人がいる。その理由は、如法経が弥勒菩薩が下生する遙かな後世に完成するものなので、現時点では未完成にして置いておくのが良いのだ、という考えに基づいている。しかし筆者はその説はとらず、現状で完成させておいても、必ずや弥勒の出世に値遇できると考えている。ここで一つの説ではあるが、如法経は未完成にしておくべきだという感覚があったのは注意される。というのは、そう考えると特色の多くが自然に理解できるからであ

る。すなわち逆巻のほか、軸が貧弱で表紙はなく巻緒に紙紐を用いている点も、未完成の仮の装幀だと理解できよう。また校正しないので、多少の間違ひは気にせずに崩して書くことができる。

逆巻の事例は、当該経典より古いものに、兵庫県三木市高男寺経塚出土の仁平3年（1153）埋納経<sup>\*ix</sup>、東京都八王子市中山白山神社経塚出土の仁平4年（1154）書写経<sup>\*x</sup>などがある<sup>\*xi</sup>。このうち白山神社経塚の経典は朱書経である。12世紀に、逆巻をはじめとする如法経の特徴が出現する。その頃、如法経とは未完成の状態で封印しておき、遙かな後世に取り出して完成すべきものだという意識が生じた、と考えることができるかもしれない。

『如法経手記』の筆者は未完成説を採用しておらず、どれほど一般的な説だったのかは不明である。一案として述べておき、今後の課題としたい。

\* i 蔵田蔵「埋経」（『仏教考古学講座』第6巻、雄山閣、1936年）、三宅敏之「経塚の遺物」（『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚、雄山閣、1977年）など参照。

\* ii 林文理「中世如法経信仰の展開と構造」（『寺院史論叢1 中世寺院史の研究上』法蔵館、1988年）など。

\* iii 『如法経現修作法』は『大正新修大蔵経』第84巻894頁・896頁。『如法経手記』は『続群書類従』第26輯上、217頁・220頁。先行研究には三宅敏之「経塚の営造について」（『日本考古学論集』6 墳墓と経塚、吉川弘文館、1986年、初出1958年）、兜木正亨「如法経と経塚」（『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚、雄山閣、1977年）などがある。

\* iv 林文理「中世如法経信仰の展開と構造」（前掲）も参照。

\* v 蔵田蔵「埋経」（前掲）。

\* vi 例えば和田千吉「常陸国新治郡東城寺村経塚

- の研究」(『考古界』第4編5号・6号、1904年)・川勝政太郎「浄土寺南田町の経塚遺物」(『史迹と美術』第280号、1958年)・吉川聡「読まれないお経」(『奈文研ニュース』No.63、2016年)参照。
- \*vii 卷第一は痕跡から判断すると、軸で経卷の右端を挟み、卷首を折り返して、軸が本文3行目の位置にあたったものと思われる。
- \*viii 吉川聡「封をする経卷—如法経の卷緒について」(湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017年)。
- \*ix 武藤誠「兵庫県三木市志染町出土の経筒と埋納経典」(『人文論究』第14巻4号、1964年)
- \*x 佐々木藏之助「八王子市中山白山神社新発見の経塚遺物について」(『多摩考古』第14号、1979年)。
- \*xi 茨城県土浦市東城寺経塚出土で東京国立博物館所蔵の埋納経も逆巻で(『東城寺と「山ノ荘」』土浦市立博物館、2021年)、保安3年(1122)や天治元年(1124)のものとも言われている(蔵田蔵「埋経」(前掲)・関秀夫『経塚の諸相とその展開』雄山閣、1990年、165頁)。しかしこれは出土状況不明で、年代を決めがたいとすべきだろう(和田千吉「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」(前掲))。